

乳児・児童への「食力」を育む環境に関する調査・研究

ハートフルママ（次世代育成応援団）

〒114-0033 東京都北区十条台 1-7-19 東京成徳短期大学 寺田研究室

助成事業の概要

目的： 咀嚼に関する研究、食力に注目し、数年前との比較研究を行う。さらに、今調査研究は保育所に加え、幼保連携認定こども園や子育て支援センター・サロン等において食力を育成するために行なわれている保育実践とその効果を明らかにする。

実施時期： 平成 26 年 4 月～平成 27 年 2 月まで実施しその後の追跡と報告を 3 月末まで実施した。

内容： 全国 642 園の保育園の保育者を対象にアンケート調査を実施。アンケート内容（「乳幼児への離乳食援助と咀嚼力を育成支援するための調査アンケート」） 場所：大阪府、宮崎市、山形市、福岡市、佐世保市、富山市、佐賀市、名古屋市、宇都宮市、松山市、徳島市、都内 6 か所に出向き保育者を対象に聞き取り調査、乳幼児の咀嚼の現状を探ってきた。更に、保育園児 25 クラスに学生 25 名とともに咀嚼力測定ガムを使用し保育者の予想と咀嚼力測定値の関係について調査した。

咀嚼力測定や食育の重要性を呼びかけるイベントとして、学生 20 名と共に、9 月に原宿外苑中で中学 3 年生 90 名と赤ちゃんとのふれあい授業。10 月学園祭において来場者へ咀嚼力調査。平成 27 年 1 月に内閣府と中野区協賛の子育て支援関連行事に参加。3 月に赤ちゃんとのふれあい交流指導者養成講座研修会で周知広告を実施した。

事業の成果

○全国 642 園の保育園保育者にアンケート調査した結果

2007 年度調査との比較では、*子どもの食事への興味 *好き嫌いの減少等は増加したが、親の意識や食事を作る回数が減少したことは、気になる点である。また、これらの親子の変化と「栄養士の有無」との関連を見てみると、「栄養士がいる」ほうが「いない」より、数値が高くなっていた。

保育園で行う離乳食援助の対応と幼児期の咀嚼力との関係においては、0 歳児入園と 1 歳時以降の入園では、保育者の主観ではあるがベテラン保育者ほど差があると考えている。つまり、0 歳児に対する離乳食の進め方や援助などの対応は後の咀嚼力や好き嫌いの多さに影響があると考えているベテラン保育者が多いということは、若手保育者への伝達の必要性があることが伺われる。さらに食育に関する保護者支援の必要性も浮き彫りにされた。

○咀嚼力ガムを 25 クラスの保育園児に使用した測定結果

保育者の予想と実際の子どもの咀嚼力を比べると、3 歳児で 29.3%、4 歳児で 42.5%、5 歳児で 77.9% と年齢と共に予想が一致していた。予想とのズレがあった割合は 3 歳児で 9.8%、4 歳児で 15.0%、5 歳児で 21.9% と、こちらも年齢と共に増加する。

担任の予想では咀嚼力が『ある』と見ていた子どもは実際に咀嚼力があり、予想と『同じ』だった

確率は 88.8% と高ポイントだったが、担任から見て咀嚼力が『ない』と思われていた子どもについては、予想と実態が『同じ』だった確率が 47.6% にとどまっている。保育者の予想では、『咀嚼力がなさそう』だとみていたが、実態は『違った』のはなぜか。以下のような自由記述が挙げられた。

- ・食が細いが咀嚼力があつた。
- ・食事中しゃべることが多く、好き嫌いもあるが、咀嚼はできていた。
- ・食事の量は多いが食べるのが早すぎるため噛めていないと思った。
- ・おとなしい性格で噛む力も弱いと思った。
- ・野菜嫌いでなかなか飲み込めないから。など

このように、測定ガムを使用することにより保育者自身も日常の保育の自己省察するきっかけとなり、園児にとっても咀嚼に対する意識向上がみられる報告も聞かれた。

また、大阪の保育園においては、2 歳児クラスからおやつに煮干しを提供していることが園児の咀嚼力に大きな影響を与えていることが数値からも明らかになった。

今後も咀嚼力測定ガムを使用した研究を継続する意義があると考察する。

その他のデータ分析から、栄養士や保育者の乳児期の食事への対応や援助は、地域の子育て家庭への大きな支援にもつながる重要なテーマであることが浮き彫りになった。

成果の広報、公表

日本保育学会・保育園保健学会・環境福祉学会・こども環境学会・子ども家庭学会等学術雑誌に成果を論文としてまとめ、投稿及び報告等する。

さらに保育所職員や幼保連携認定こども園職員・児童館職員・子育て支援センター職員・サロン担当者等が在宅家庭の乳幼児へのケアの仕方も含む『乳幼児への離乳食援助と咀嚼力・食品認

知力育成』や放課後児童への食育意識向上にあたるための助言も加えた報告書を協力園、協力者に配布する。

今後 27 年度講師依頼されている保育研修会[(6 月東京都社会福祉協議会主催研修・8 月長崎県主催研修会・10 月富山県社会福祉協会主催研修会・都内北区・中野区・大田区・品川区・世田谷区・港区・埼玉県における保育者対象研修会や本学研修会・あかちゃんとふれあいアドバイザー対象研修会(9・2・3 月)]の中で当研究の報告会を実施する。

さらに環境福祉学会等でも学生と共に報告していく予定である。

今後の展開

今後は、学会発表をし、乳幼児への離乳食援助と咀嚼力を育成支援するための意義と意味を報告し、研究者や保育者と意見交換する企画を増やしていく。

更に、本学の乳児保育の授業や保育研修会の中でも活用していく予定である。

保育者が保育を行う中で咀嚼力があると考えていた園児が咀嚼力測定ガムを使用することにより予想と違うことに会う事やこの調査を行う事により、咀嚼する事の重要性に気付いた保育者が数多くいたことは、本調査を実施したことの意義があるといえる。そのため、地域を定めた継続研究や咀嚼とアレルギーの関係などについても継続研究を実施していく予定である。また学生達とともに地域に出向いたり、本学学園祭において咀嚼力測定ガム体験を実施し、その効果意義についても、広く広報し、さらなる研究を深めていく予定である。